

2010年11月10日

る。

もつとも、その描出方法

は理知的で極めて精緻であ
るにもかかわらず、そこに
徹底的に理知的に描出す

りだした。

堀川すな

の作品は、そ

のようなキュービズムを思

わせる。彼女が描くのは、

ライターやノコギリといっ

た工業製品である。製品そ

のものではなく、それつの

図面を描く。一枚の平面上

に複数の図面を重ね合わせ

たり、ひとつ製品をさまざま

な角度からとらえた図

面を併置したりする。その

ようにしてキュービズムさ

ながらに、複数の視点から

徹底的に理知的に描出す

ギャラリー

複数の視点から 理知的に描出

堀川すなお展

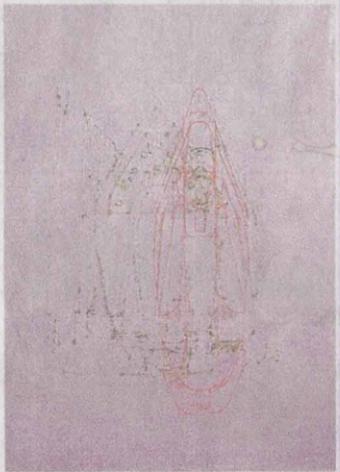
今から100年ほど前、絵画の歩みに一つの転機が訪れた。ブラックとピカソによって発明されたキューピズムである。対象を複数に構成するキューピズムは、ルネサンス以来の単一の視点による描写とは決定的に異なる絵画空間を創

りだした。

描写されている物に対しても現実感を覚えたり、あるいは個別性を感じたりする」とはないだろう。というのも、堀川が描く対象はいずれも図面化可能な物、すな

は、高度消費社会におけるキューピズムであると言えるだろう。（見玉＝河原町十条25日まで 日・月・祝休）

（安河内宏法
館学芸員） 京都市美術



堀川すなお展から

わち大量生産可能な物だからである。言い換えれば、そもそもコピーとしてしか存在しない物であり、社会の中に偏在する物なのである。この点が画家の眼前に確かにあつた物を対象としたキューピズムとの最大の違いである。大量生産可能で、他の製品と記号的な差異しか持たない物。われわれの生活を取り囲むそのような物を描く堀川の作品

は、高度消費社会におけるキューピズムであると言えるだろう。（見玉＝河原町十条25日まで 日・月・祝休）